



雲と、太陽と、市長が、会議を開いていた。

「昨日も降りましたなあ」と、市長が口を開いた。

「そうですね。それは、今日の午後には太陽さんに溶かしてもらって」と雲は言った。

「はい、もちろんです。まだまだ早いですからね」と太陽が朗らかに言った。

「けっこう。まだタイヤの交換をしてないんでね、私。それで、いつになります？」市長が身を乗り出した。

「そうですね。先日の会議では、20日前後でどうかというところで終わっていたのですが」と雲が、資料をパラパラとめくりながら言った。「でも今年は寒いですからね～」と太陽が椅子にもたれながら言った。

「少し早めに、19日では？」と市長が提案した。

「でも、昨日も苦情が来てましてね」雲が顔を曇らせて言った。

「苦情？どんな？」と太陽がブワッと音をたてさせながら、雲の方を向いた。

「まあ、雪がとけるのは喜ばしいことなんだけれども、こう寒くなってくると、溶けた雪が夜には凍って、つるつるになります。それで転んで足を折ってしまったという内容でした」

「何件くらい？」と市長も真剣な面持ちで聞いた。

「一件です」

「あ、たった一件ですか？」苦情に慣れ過ぎている市長は驚いた。

「ま、私たちの連絡先を知っている人は少ないですからね」と雲は落ち着き払って言った。

「あ、もくもくラインですか」と市長はうれしげに言った。

「ええ、そうです」と雲は冷徹に言い「なので、少し例年より早めにしてもいいかと」と話を本題に戻した。

「じゃあ、17日でどうですか？ちょうど日取りもよいことですし」と太陽が鼻くそをほじりながら言った。

「日取りが良いとは？」と雲がすかさず聞き返した。

「7のつく日は、なんだかいいことが起きるんです。私」

「それは、あなただけのことでは？」

「まあ、まあ、でもいいじゃありませんか、17日で。それならタイヤ交換も十分に間に合う」

「わかりました。では、17日ということで決定ですね。その日から、私どっと降らせますから。太陽さん、あんまり頑張りすぎないようにお願いしますよ」

「ほ～い」

「それでは、会議はこれで終了ですな」

こうして、本年の根雪になる日が決定したのだった。

「これは根雪になるのかね～」 「どうだろうね～」という会話が雪国では毎年されているのですが、毎年、いつの間にか「あ、もう根雪になってる」と後から気づくだけで、はっきりといつから根雪だったのかというのは、意外とわからないものです。でも市長さんは知っていたんですね～。

## 【2017-12-16】 指さし小説 第21話

<http://p.booklog.jp/book/119135>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119135>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト